岩槻城跡を探る

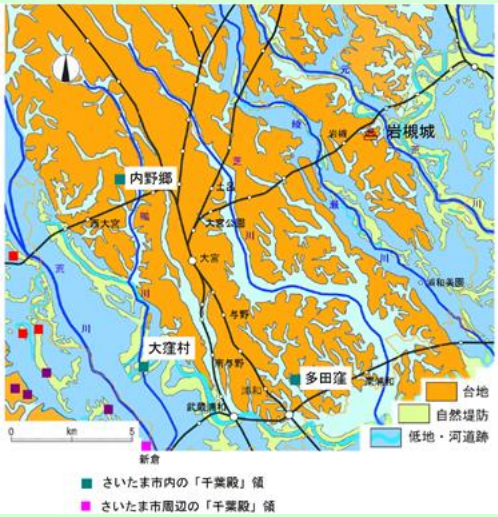
第９調査室　城の外　さいたま市域と岩槻城

調査レポート②-2　太田窪と岩槻城　中編の上

相模国小田原城（神奈川県小田原市）を本拠に、関東の統一を進めた戦国大名・北条氏。その北条氏が 1559 年（永禄２年）、家臣たちに負担させる軍役などの基本台帳を作成しました。『小田原衆所領役帳』『北条家所領役帳』などと呼ばれている史料です（以下では、略称して「所領役帳」と表記します）。その中に、「千葉殿」という武士の所領として、「内野郷」（さいたま市西区内野本郷とその周辺）、「大窪村」（さいたま市桜区上大久保・下大久保）、「大多窪」（さいたま市緑区・南区太田窪）が掲げられています。

この 1559 年当時、岩槻城主太田資正はさいたま市の全域を支配下に収め、北条氏から「他国衆」と位置付けられていました。資正は、北条氏に服属してはいるものの、その支配領域（「岩付領」）に対しては、独立した権限が認められており、わずかな例外を除けば北条氏の一般の家臣の所領はそこにはありませんでした。その例外が、「千葉殿」の三つの所領です。このことを糸口に、戦国時代の岩槻城とさいたま市域との関わりをひもといていきます。

「前編」では、「千葉殿」の三つの所領が特異な例外であることを確認しました。この「中編」では、その例外たるゆえんを「千葉殿」のあり方に探っていきます。前半（中編の上）では、関東における戦国の世の幕開けとなった「享徳の乱」の初期に、下総国の守護大名・千葉氏が分裂し、敗れて武蔵国に亡命して「武蔵千葉氏」が誕生したこと、そしてその「武蔵千葉氏」がその後の諸勢力の興亡・離合集散の中を生き抜き、最後は北条氏に服属して「千葉殿」と呼ばれるようになるまでを跡付けます。後半（中編の下、別ファイル）では、「武蔵千葉氏」誕生から「千葉殿」までの経過の中に、三つの所領が「千葉殿」領となる契機を探ります。



「千葉殿」

「千葉殿」

「所領役帳」における「千葉殿」の知行高は４７５貫文。この知行高は、各衆の筆頭者などの北条氏累代の重臣には及びませんが、中堅よりも上位の位置を占めています。北条氏家臣団の中でも有力者であり、「殿」という敬称を付けて処遇される、一目置かれる存在でした。但し、「殿」と呼ばれることが所領の規模や有力者ということに由来するのかといえば、どうもそうではありません。

たとえば、「千葉殿」が属する江戸衆の構成をみてみると、次のような構成であることが指摘されています（表２）。江戸衆には「千葉殿」よりもはるかに有力な者が多数いましたが、「殿」で呼ばれてはいません。「前編」でみた太田資正が同盟者的な処遇を受け、しかも「千葉殿」を上回る知行高を有しながらも、「殿」を付けられていないこともあわせ、鮮やかな対照をなしています。とすると、単に知行高の高下だけで「殿」を付けられているわけではないようです。

表２　「所領役帳」における「江戸衆」の構成

※『北区史　通史編　中世』（文献 10）P226 掲載表より作成

寄親	知行高	所在地域別内訳			備考
		江戸地域	葛西地域	その他地域	
遠山丹波守（綱景）	2048貫435文	111貫 20文	1029貫835文	907貫580文	北条氏譜代重臣、江戸城代
同心38人	3904貫653文	671貫597文	412貫700文	2820貫356文	
千葉殿	475貫文	120貫文	35貫文	320貫文	
同心２人	108貫700文	50貫700文	45貫文	13貫文	木内氏、円城寺氏（千葉氏重臣）
島津孫四郎	533貫132文	331貫 60文	32貫文	170貫72文	
同心7人	329貫296文	170貫842文	0	158貫454文	
太田大膳亮	544貫500文	288貫881文	15貫300文	240貫319文	北条氏重臣
同心	83貫 97文	71貫 97文	0	12貫文	
小幡源次郎	673貫300文	0	100貫文	573貫300文	
同心2人	145貫文	0	0	145貫文	
富永弥四郎（康景）	1383貫730文	150貫文	0	1233貫730文	北条氏譜代重臣
同心3人	555貫323文	8貫623文	56貫350文	490貫350文	
太田新六郎（康資）	1419貫900文	1207貫463文	2貫850文	209貫587文	江戸城旧城主の子
同心14人	604貫549文	545貫519文	0	59貫 30文	

実際、「所領役帳」全体を見ても、敬称「殿」が付けられているのは、北条氏一門以外では、ごく限られた者です（表３）。それは、北条氏のもとに身を寄せた幕府関係者をはじめとする家格の高い者と、北条氏が特別な配慮を必要とした者などです。つまり「千葉殿」もそのような者たちの一人であったと考えてよいでしょう。

それらの人々の中には、「千葉殿」と同じく、軍役以外の所領役を免除されている者がいま

表３　「所領役帳」における「殿」呼称　　※法名の「●●寺殿」は除く

	衆	人物名	位置付け	備考
1	小田原衆	六郷殿	宅間上杉氏一族か	
2	玉縄衆	左衛門大夫殿	北条氏一門（北条綱成）	
3	江戸衆	武田殿	真里谷武田氏一族か	
4		大森殿	小田原大森氏一族か	
5		千葉殿	★武蔵千葉氏	
6	寺領	泰平寺殿	鎌倉尼五山第一位	
7		松岡殿	鎌倉尼五山第二位、東慶寺	
8	御家中衆	宅間殿	宅間上杉氏（宅間富朝か）	
9		左衛門佐殿	北条氏一門（北条氏尭）	
10		三郎殿	北条氏一門（北条幻庵の長子か）	
11		備中殿	幕府政所執事一族、北条氏一門	小田原に居留
12		伊勢兵部頭殿	幕府政所執事一族、北条氏一門	小田原に居留
13		同　八郎殿	幕府政所執事一族、北条氏一門	小田原に居留
14		太和殿	幕府奉公衆一族	小田原に居留
15		小笠原六郎殿	幕府奉公衆、北条氏姻戚	小田原に居留
16		同　弥六殿	幕府奉公衆、北条氏姻戚	小田原に居留
17		興津殿	駿河今川氏被官か	

す。ここであらためて「所領役帳」において「殿」呼称されている者と所領役との関係を見てみてみましょう（表３）。表３の№.１「六郷殿」、№.３「武田殿」、№.４「大森殿」、№.８「宅間殿」は所領役の一部免除が定められています。

№.１「六郷殿」は、多摩川河口部両岸（東京都大田区から川崎市周辺）を中心に１１５貫３６４文を知行していますが、「この役、御牢人の御人体につきて、赦免御申す」とあります。「六郷殿」は所領役を免除されていました。その理由は、「牢人」。この言葉からは、本領を離れ、家臣団も解体し、北条氏のもとに身を寄せている状態にあり、諸役を万全に果たせる状態ではないということが免除の理由だと考えてしまいそうです。

しかし、単に零落し落ちぶれて北条氏を頼っているというわけではないことが、「御牢人の御人体」というように「御」を冠して敬意を示していることからもうかがわれます。北条氏は「六郷殿」を客分として遇しているわけです。この「六郷殿」は、関東管領（かんとうかんれい）上杉氏の一族の宅間上杉氏（たくまうえすぎし）と考えられています（文献５）。上杉氏一族は室町幕府のもとで関東の統治にあたった鎌倉府（かまくらふ）において、関東管領（鎌倉府の主帥である鎌倉公方を補佐する政務統括者）や諸国守護などの要職を務めた名門中の名門。その一族である宅間上杉氏は、室町時代には武蔵国六郷保（東京都大田区）を所領としていました。北条氏が武蔵国に進出してきた時、所領を失いましたが、その後北条氏の家臣の列に加わったといいます。この「六郷殿」は一度は「牢人」となりながらも、北条氏への服属を機に、名門上杉氏一族に対する北条氏の配慮により旧領の知行を認められて

いたのでしょう。武蔵国南部の六郷保周辺の一領主としてのあり方自体、北条氏による恩典だったわけですが、それでも北条氏は「所領役帳」において「殿」を付け、軍役以外の諸役免除をもって厚遇していたのでした。

№3「武田殿」は、久良岐郡六浦（横浜市）で１２７貫文を知行し、№4「大森殿」は相模国中郡平沢（神奈川県秦野市）などで９６貫５００文を知行していますが、両者とも「前々より役なし。但し、御人数はその改めこれあるべし」とされており、「千葉殿」と同様です。「武田殿」は戦国時代前半に上総国に大きな勢力を築いた真里谷武田氏の一族と考えられています（文献１１・１２）。北条氏や周辺国衆との争いに加えて、一族内の争いなどもあって、本国を離れて北条氏に帰服した者と考えられます。「大森殿」は室町時代末期に駿河国東部から伊豆国北部、そして相模国西部に大きな勢力を築いた大森氏の末裔と考えられます。大森氏の拠点・小田原城を戦国大名北条氏の家祖・伊勢長氏（いせながうじ。一般にいわれる北条早雲）が攻略したことでよく知られています。上杉氏や上総武田氏よりも一段格下の家柄ではあるものの、因縁のある大森氏の末裔を北条氏は敬意をもって遇していたわけです。

№8「宅間殿」は相模国東郡永谷（横浜市）などで３００貫文を知行していますが、「普請役はこれあり。出銭そのほか御用の時は、御直書をもって仰せ遣わさるべし」とされています。これは、原則として所領役は「普請役」のみで、その他の役を賦課する際には、「御直書」すなわち北条氏当主直々の書面で申し付けるということです。この「宅間殿」も№1の大森殿と同じく宅間上杉氏の一族と考えられます（文献５）。所領役免除のあり方は、他の者たちと異なってはいますが、「殿」を付して「所領役帳」に登載した者に対する処遇のあり方として、留意される事例です。

以上の人々は、「所領役帳」編さん当時には往時の勢力を失ってはいるものの、戦国時代幕開け前後の関東の政治秩序においては、鎌倉公方に直結していた有力者の末裔たちです。公方以外の者の家臣や大名の配下とはなっていない者と言い換えることもできます。北条氏は配下に収めたそうした人々を敬意をもって遇し、一般の家臣とは異なる恩典・特権を与えていたわけです。北条氏はこのような処遇をすることで、伝統的な勢力圏を侵略し版図を広げるだけではなく、伝統的な秩序にも重きを置いていることを示しています。また、こうした処遇をすることで、上杉氏の家臣であった太田氏などや、各国守護の配下となっていた国衆などに対しては、守護級の人々との身分差を可視化するはたらきも想定することができます。

「千葉殿」がこれらの人々と共通している点、それはやはり、武士としての高い家格です。はじめにも触れておいたように、「千葉殿」は、平安時代以来の下総国の最有力武士・千葉氏の末裔です。室町時代まで下総国の守護職を世襲した、東国の名門中の名門です。数奇な運命により衰えたとはいえ、その系譜を引く者に対する処遇として、諸役を免除した上で、「殿」を付けて呼んでいたのです。

では、本来下総国の武士である「千葉殿」が武蔵国において北条氏の配下に属し、江戸衆に編成されていたのは何故なのでしょう。そしてその「千葉殿」がさいたま市域の三つの所領を知行していたのは、どのような経緯によって生じたことなのでしょう。

その点を考える前に、もう一つ、説明しておくことがあります。それは表２の「千葉殿」の欄に記した「同心二人」についてです。

「千葉殿」の家臣

「所領役帳」には、「前編」の冒頭で掲げた「千葉殿」分に続いて、次のような記載があります。

一　木内宮内少輔

江戸

⑭拾二貫四百八拾文　石浜今津

葛西

⑮四拾五貫文　堀内

以上五拾七貫文

一　円城寺

六郷内

⑯廿貫文　鎌田

多東郡

⑰拾貫文　石田

⑱三貫文　道宗分

江戸

⑲拾八貫弐百廿文　上野

以上五拾一貫弐百廿文

※『戦国遺文後北条氏編　別巻　小田原衆所領役帳』（文献１）より
※引用にあたり、各知行単位の先頭に、「前編」で「千葉殿」の所領に付した番号に続けて、⑭～⑲の番号を付しました。

ここに掲げた「木内宮内少輔」と「円城寺」は、「千葉殿」の重臣と考えられている人々です。彼ら以外の家臣は、おそらく「千葉殿」分の所領の中に「千葉殿」から所領を与えられていたと考えられますが、この二人は、「千葉殿」の家臣の中でも別格で、「千葉殿」とは別枠で所領知行を北条氏から認められていたことがわかります。先に述べた「同心二人」とは、彼らのことを指しています。

この二人のうち、木内氏は鎌倉時代に千葉氏本家から分かれた分家筋で、室町時代には千葉氏の重臣となっていました。「円城寺」も同様です。武蔵千葉氏成立の発端となった千葉氏

の内訌は、重臣の円城寺氏と原氏との争いが直接のきっかけだったと考えられています。円城寺氏は一族を挙げて千葉氏本家に従ったようで、武蔵千葉氏のもとでの活躍がいくつかの史料に記されています。木内氏は、本家と同様に分裂し、武蔵千葉氏に従う一派と本家を乗っ取った千葉氏に従う一派の二派に分かれました。武蔵千葉氏に従った木内氏の確実な史料への登場は少ないのですが、「後編」で取り上げるように、さいたま市南区太田窪には千葉氏家臣の木内氏の伝承が伝えられています。

「千葉殿」の所領を考える際には、この二人の所領も考慮にいれる必要があるのです。

では、また本筋に戻って、「千葉殿」のあり方をたどりながら、疑問の糸のもつれを解く探索に進んでいきましょう。

千葉氏が武蔵にやってきた
～ 武蔵千葉氏 ～

東国の名門・千葉氏

はじめにも触れておいたように、「千葉殿」は、平安時代以来の下総国の最有力武士・千葉氏の一族です。ここであらためて、千葉氏とはどんな武士なのかを、駆け足でみておきましょう。

千葉氏は、桓武平氏の出身で、平安時代後期に大反乱を起こし、清和源氏が東国に進出するきっかけを作った平忠常（たいらのただつね）の子孫です。忠常の子孫は、主に下総国に勢力を築いた千葉氏と上総国に勢力を築いた上総氏に分かれ、平安時代末期にはそれぞれが清和源氏と主従関係を取り結んでいました。ところが、清和源氏嫡流の源義朝（みなもとのよしとも）が平治の乱で平清盛（たいらのきよもり）に滅ぼされると、千葉氏は平氏に近い勢力や一族の上総氏の圧迫を受けるようになりました。しかし、源義朝の子の頼朝（よりとも）が平氏打倒の兵を挙げるや、千葉氏の当主の常胤（つねたね）はそこに積極的に参画し、幕府開創の功臣の一人となりました。さらに、一族の上総介広常は千葉氏以上の功臣となりながらも、源頼朝によって粛清されてしまいます。すると、千葉氏は広常の勢力圏も頼朝から与えられました。

こうして千葉氏は、鎌倉幕府における御家人の代表格となり、下総国などの守護に任じられるとともに、東北地方や九州地方をはじめ、各地に広大な所領を得て、全国に一族を分出していきました。鎌倉時代から南北朝時代を経て室町時代に至っても、幾多の危機を乗り越えて、千葉氏は「大名」として、下総国を中心に大きな勢力を築いていきました。関東には鎌倉時代以来の「大名」が並みいる中で、千葉氏はその最上位として処遇されました。

ところが、室町時代末期、関東における戦国時代の幕開けともいわれる享徳の乱（きょうとくのらん）が勃発します。１４５４年（享徳３年）のことです。この戦乱は、鎌倉公方足利成氏（しげうじ）が、関東管領上杉憲忠（かんとうかんれい　うえ

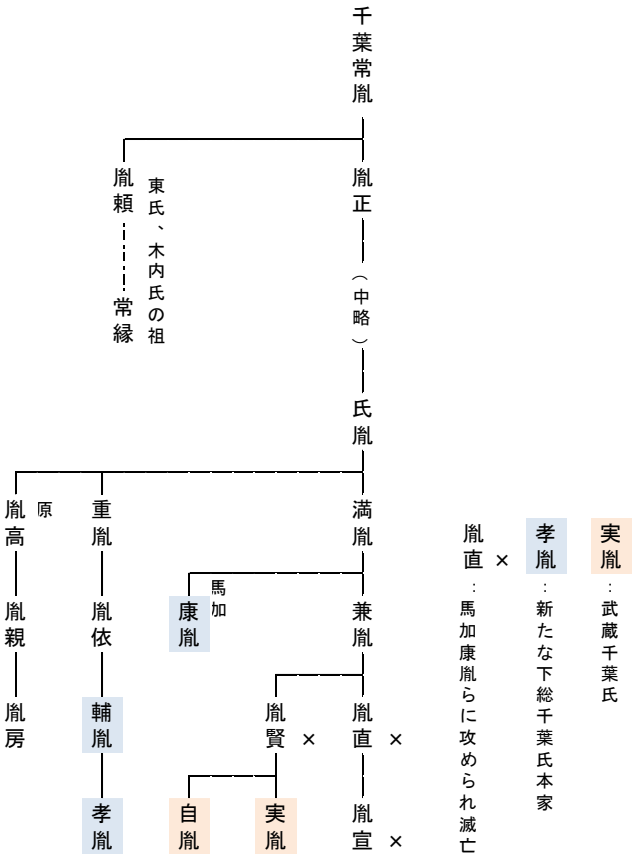


図４　千葉氏略系図
※黒田基樹「享徳の乱と武蔵千葉氏」（文献４）、
同「太田道灌と武蔵千葉氏」（文献８）を参照して作成

すぎのりただ）を謀殺したことから始まりました。鎌倉公方は、室町幕府のもと、関東の統治を担っていた鎌倉府（かまくらふ）の首長、関東管領はその補佐官でした。

京の幕府は上杉氏を支持し、成氏の討伐を命じたことから、関東の諸勢力は公方方と幕府・上杉氏方とに分かれて争うことになりました。機先を制せられた上杉氏方は、幕府からの援軍を得て勢力を盛り返し、成氏は鎌倉から下総国古河城（茨城県古河市）へと本拠を移しました。以後、成氏とその後継者は本拠の地名をとって「古河公方（こがくぼう）」と呼ばれるようになります。山内上杉氏は上野国平井城、扇谷上杉氏は武蔵国河越城を拠点とし、さらに各地に戦略上の拠点を設けて古河公方方と対峙していきます。なお、岩槻城が築城されたのもこの戦乱の過程におけることとされています。

この戦乱の中で千葉氏は古河公方方と幕府・上杉氏方に分裂し、幕府・上杉氏方に味方していた千葉氏本家の主だった者は古河公方方についた分家に攻め滅ぼされてしまいました。辛うじて逃れた本家の実胤（さねたね）・自胤（これたね）兄弟は、幕府・上杉氏の支援を受けて市川城（市川市）に籠城して古河公方方と戦いますが、１４５６年（康正２年）、そこも攻め落とされ、武蔵国へと逃れました。

武蔵千葉氏

翌１４５７年（長禄元年）夏ころには、千葉兄弟の重臣の円城寺氏が下総国に攻め込み、これには山内上杉氏も関東東部の拠点である常陸国信太荘の家臣たちに円城寺氏と連携した作戦を計画しており、幕府・上杉氏方を挙げた反攻作戦が展開されたようです（文献４）。しかし、戦果は挙がらず、千葉兄弟の武蔵国亡命は長期化していきます。千葉実胤・自胤兄弟は、石浜（東京都荒川区）と赤塚（東京都板橋区）を拠点として、下総国の奪還を目指していきます。

本拠を追われ、本来は没落してもおかしくない千葉氏本家は、古河公方方との対決の必要上、幕府・上杉氏から亡命の地において支援措置を受けて何とか勢力を維持し、その上で下総国への反攻の旗頭ともされました。

したがって、実力面では往時には遠く及ばないものの、下総国を代表する名門「大名」家の当主としての位置づけはかわりませんでした。この系統の千葉氏を「武蔵千葉氏」と呼んでいます。

今出て来た赤塚は、豊島郡北西部の赤塚郷のことです。この赤塚郷は「所領役帳」の「千葉殿」分所領の冒頭に掲げられていた「赤塚六ヶ村」に相当します。ということは・・・そう、「千葉殿」はこの武蔵千葉氏の末裔なのです。戦乱が打ち続く中、武蔵千葉氏は幾度かの危機を乗り越え、戦国時代にまで命脈を保っていたのです。そして、伊豆国を足掛かりに関東に勢力を拡げつつあった北条氏は、武蔵千葉氏の名門としての立場・家格を尊重し、「所領役帳」においても「千葉殿」

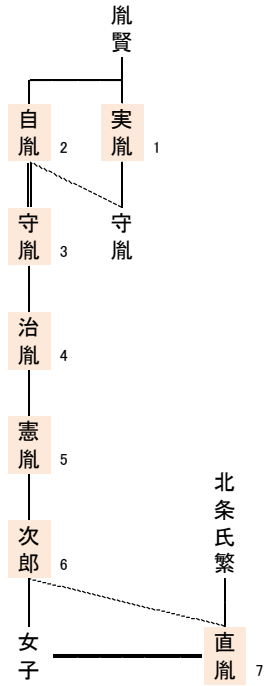


図５　武蔵千葉氏略系図
※黒田基樹「戦国期の武蔵千葉氏」（文献 13）より作成

と敬称を付け処遇していたのです。

武蔵千葉氏の歴代については、確実な史料が乏しく、さまざまな想定がなされてきています。ここでは、前ページの系図（図４）で参考にした諸研究をもとに、その後の略系図を掲げておきます（図５）。当初、実胤・自胤兄弟が並んで活動していましたが、兄の実胤が当主の地位につき、平安時代以来の千葉氏当主の称号である「千葉介（ちばのすけ）」を称しました。その後、享徳の乱の政情が混迷の度を深めるにつれて、実胤は失脚し、自胤がその跡を継ぎました。この自胤のもとで、享徳の乱末期の混乱やその後の上杉氏の分裂なども乗り切っていきました。自胤は実胤の子の守胤を養子としたようで、治胤、憲胤と続きます。世代的には「所領役帳」の段階の当主は、憲胤であった可能性があります。

なお、その後の当主は、実名（じつみょう）は不明で、確実なところでは次郎という通称のみが知られています。この人は、１５７３年（天正元年）の北条勢による関宿城（千葉県野田市）攻めの際に討死し、その跡を北条氏一門の北条氏繁の子が継承して直胤と名乗りました。そして恐らくこの直胤のときに、１５９０年（天正１８年）の豊臣秀吉による関東侵攻を迎え、戦国領主としての武蔵千葉氏は北条氏と運命を共にしました。

さて、武蔵千葉氏の歴代をざっとみてみたわけですが、これですと何となく話は簡単そうに感じますが、武蔵千葉氏が誕生してから北条氏のもとでの「千葉殿」誕生までの間、関東では複雑な抗争・勢力の盛衰がありました。太田窪など三所領と「千葉殿」との関わりも、その経過と切り離して考えることはできません。そこで、武蔵千葉氏が北条氏の配下に加わるまでの経過を、もう少したどってみることにします。但し、この道のりは極めて難渋で幾筋もの分岐があると同時に、迷路や陥穽がそこかしこで待ち構えています。先を急ぐ方は、以下、１３ページまでは飛ばして、１４ページから続きをご覧ください。

享徳の乱の経過における武蔵千葉氏

享徳の乱の経過を複雑でややこしくするのが、上杉氏が進める対古河公方戦略と並行して、幕府も独自の施策を進めたことです。千葉氏本家の劣勢に対しては、千葉氏一族で幕府に奉公衆（将軍の直属部隊）として仕えていた東常縁を下総国に特派して（１４５５・康正元年）、本家を乗っ取った千葉氏の追討に当たらせ、鎌倉公方不在となった関東の政治秩序再建のために、関東における新たな首長を派遣したことがその代表です。

なかでも、新たな首長を派遣したこと、すなわち、足利成氏にかわる鎌倉公方を派遣したことは、大きな影響を及ぼしました。１４５７年（長禄元年）、将軍義政は弟の政知（まさとも）を鎌倉公方とし、政知は、足利一門の有力者・渋川義鏡（しぶかわよしかね／よしあきら）や関東上杉氏一門の犬懸上杉教忠（いぬかけ　うえすぎのりただ）、それに奉公衆らの幕僚とともに翌年８月頃、関東に到着しました。但し、政知は鎌倉には入れず、やがて伊豆国堀越（静岡県伊豆の国市）に本営を構えたことから、「堀越公方（ほりごえくぼう）」と呼ばれました。山内上杉氏や扇谷上杉氏は、一応、堀越公方を関東の政治の主宰者として仰ぎましたが、古河公方方と直接対峙しながら勢力圏を構築しつつあった両上杉氏と堀越公方の間

にはトラブルが絶えませんでした。

堀越公方を軍事的に支えたのは、渋川義鏡でした。渋川氏は南北朝時代から武蔵国足立郡蕨郷（蕨市）を所領としており、関東に下った義鏡は、蕨城を築いて拠点としたといいます。さらに浅草（東京都台東区）にも前線基地を築いて一族を派遣していました。そして、この時期、武蔵千葉氏の存立基盤確保に尽力したのも渋川義鏡だったようです。

先ほど、１４５６年に市川城から逃れた千葉実胤・自胤兄弟は武蔵国石浜・赤塚を拠点としたと述べましたが、千葉兄弟がそれらを与えられたのがいつのことなのかは、実は定かではありません。兄弟が武蔵国に逃れてから４年後の１４６０年（寛正元年）、将軍足利義政が堀越公方に命令を発し、千葉実胤への支援を命じました。その文面には、「千葉介困窮のこと」とあります。「千葉介」は、千葉氏本家の当主が名乗る称号。幕府が千葉実胤を下総千葉氏の正統な後継者であると位置づけていたことがわかりますが、そうした高い格付けと裏腹の「困窮」がこの命令の主題でした。この「困窮」とは、実胤が食うや食わずの状態にまで零落していた、ということではないでしょう。名門としての威儀を維持しつつ、下総国の奪回を目指すのに必要な軍勢を維持する基盤、要するに家臣たちを養う所領や傭兵を雇い入れる財源が不足しているということと思われます。千葉実胤は上杉氏らからは思うような措置を講じてもらえない状態に耐え切れず、京の幕府に直接訴えたのでしょう。あるいは、実胤兄弟の実情を知悉していた東常縁がそれを取り次いだのかもしれません。

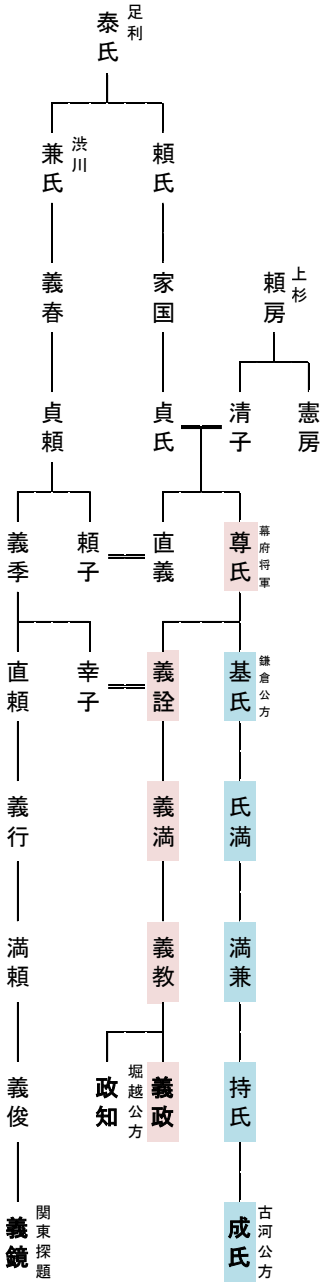


図６　足利氏と渋川氏

ところが、その二年後、小さな事件が起こりました。千葉実胤の隠遁騒動です。突然の実胤の隠遁は、この前年に顕在化した堀越公方と扇谷上杉氏との間のトラブルの余波であった可能性がありますが、これに慌てた幕府・上杉氏方は、実胤の慰留に努める一方で、対古河公方戦略上、下総国攻略の正統性を体現する武蔵千葉氏を存続させるため、弟の自胤に家督を継承させるとともに、自胤への扶助を将軍義政直々に堀越公方に命じました。

この一連の命令を承けて堀越公方が講じた支援措置の全容はわかりませんが、その内の１か所がわかっています。武蔵国豊島郡赤塚郷です。「所領役帳」の当時まで「千葉殿」領となっていた、あの赤塚です。千葉自胤に預ける所領（兵粮料所・ひょうろうりょうしょ）を物色していた堀越公方府では、渋川義鏡の熱心な薦めによって、赤塚郷を自胤に与えました。このことがわかるのは、この二年後の１４６２年、赤塚郷の知行主である京都の鹿王院が武蔵千葉氏の知行を停止し赤塚郷の支配圏を返却するよう、幕府に訴え出たからです。そしてこの訴えに関わる文書が訴え主であ

る鹿王院に伝わっていたからです。トラブルの発生とそれに関わる史料が一方の当事者のもとに残っていたことから、たまたま赤塚郷については、渋川氏の差配による手当の事実を知ることができるわけです。

渋川氏

赤塚郷と渋川氏との間には、南北朝時代からのゆかりがありました。１３３３年（元弘３年）鎌倉幕府打倒の最大の功労者とされた足利尊氏（たかうじ）・直義（ただよし）兄弟は、後醍醐天皇から膨大な所領を恩賞として与えられましたが、直義が拝領した所領の中に赤塚郷がありました。その後、直義は兄尊氏と争い滅ぼされます（観応の擾乱・かんのうのじょうらん）が、赤塚郷は直義の妻の頼子（本光院殿）に継承されました。彼女は、足利一門の有力者・渋川氏の出身でした。その後、彼女は姪の渋川幸子に赤塚郷を譲りました。幸子は、室町幕府二代将軍・義詮（よしあきら）の妻で、三代将軍となる義満（よしみつ）を養育しました。

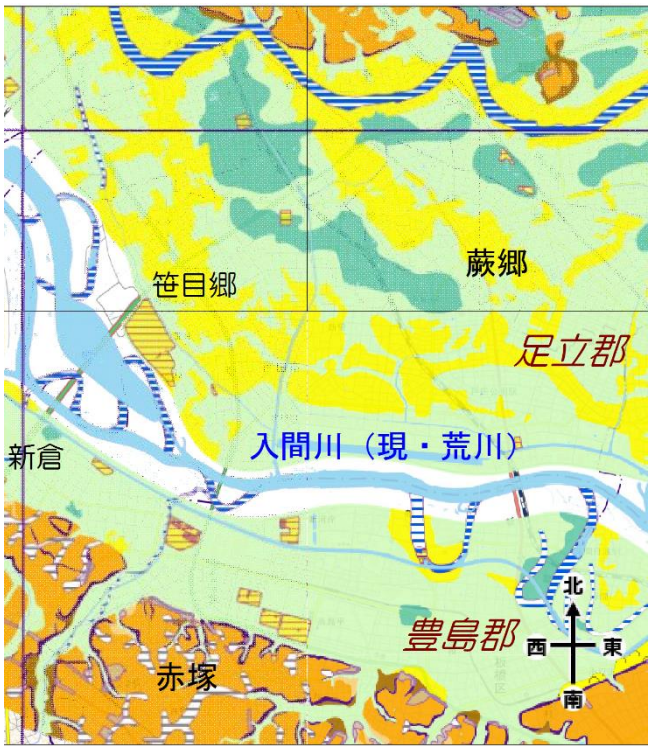


図７　蕨郷と赤塚
※国土地理院「治水地形分類図
更新版（2007～2021 年）」に加筆

この頃、実家の渋川氏は幕府の重職として京都で活動していましたが、南北朝時代の早い時期に恩賞として武蔵国足立郡の蕨郷（蕨市周辺）を獲得していました。蕨郷と赤塚郷は、入間川（現在の荒川）をはさんで指呼の間でしたから、二代にわたり渋川氏出身の女性が赤塚郷を知行している間、実家の渋川氏が赤塚郷支配を支援していた可能性があります。その後、幸子は１３８３年（永徳３年）に鹿王院に赤塚郷を寄進し、鹿王院は代官を現地に派遣して直接支配に乗り出しますから、渋川氏との直接的な関わりはここで途絶えたのかもしれませんが、関東探題として関東に派遣された渋川義鏡にとって、赤塚郷はゆかりのある所領でした。また、来歴からいって赤塚郷は、広い意味での幕府の直轄領でした。

図８　石浜城跡伝承地周辺（東京都荒川区南千住）
石浜城跡の有力な推定地、石浜神社附近。
左手は隅田川、右手が石浜神社

渋川義鏡と武蔵千葉氏との関わりでは、もう一点、興味深い事例があります。先ほども述べたように、関東に下向した義鏡は一族の渋川伊予守を浅草に派遣し、下総国方面への前線基地としました。浅草は、武蔵・下総国境の大寺・浅草寺（浅草寺）のある土地ですが、武蔵千葉氏が拠点とした石浜の南隣にあたり、この２地点は同じ千束郷内であったと考えられます。しかも、石浜は国境の大河・隅田川の古代以来の渡河点かつ江戸湾（現在の東京湾。当時は浅草の東側にまで海が入り込み、大きな入り江状になっていました）西岸最奥部の港湾でもありました。室町時代初めころまでに成立した『義経記（ぎけいき）』（文献 14）には、「西国船」が数千艘も停泊する大きな港として描かれています。武蔵・下総間の軍勢の移動においてはもちろんのこと、江戸湾・内陸間の流通や物資移動においても重要な地点であったことがうかがわれます。渋川義鏡が浅草に一族を派遣したのは、この石浜の地をも掌握した上で、下総国方面への抑えとする意図があったのではないでしょうか。

渋川伊予守のあまりにも早い陣没によってこの戦略は頓挫してしまいますが、武蔵千葉氏が石浜に拠点を構えるのは、渋川氏によるこの地域への拠点構築を武蔵千葉氏が引き継いだ可能性もあります。

図９　浅草と石浜
※国土地理院「治水地形分類図 更新版（2007～2021 年）」に加筆

扇谷上杉氏の寄騎として

享徳の大乱は容易には決着がつかず、２０年以上続きましたが、１４７６年（文明８年）、大きな転機が訪れました。山内上杉氏の重臣の長尾景春（ながおかげはる）が反乱を起こし、幕府・上杉氏方の本営・五十子の陣（いかっこのじん。本庄市）を急襲して瓦解させたのです。景春は古河公方に帰服してその支援を受け、さらに山内上杉氏の家臣や各地の国衆たちの中にも景春に味方する者が多数あらわれました。情勢の混迷と諸勢力の錯綜が複雑化の度

合いを増しました。

武蔵千葉氏の実胤・自胤兄弟もこの争乱の中で分裂し、実胤は景春方についた山内上杉氏の重臣・大石石見守（おおいし　いわみのかみ）の誘いに乗って、葛西（かさい。東京都葛飾区）の大石石見守のもとに陣を移しました。景春を支援した古河公方の影響下に入ることで、古河公方の差配により下総国での復権を目指そうとしたようです。しかし、古河公方足利成氏は実胤の復権を認めませんでした。加えて、長尾景春の乱の平定、そして幕府・上杉氏と古河公方との和睦によって、実胤は進退に窮してしまいました。結果的に、関東から逃れ、美濃国（岐阜県）に落ち延びていきました。

図 10　葛西城趾（東京都葛飾区青戸）
環七通りをはさんで葛西城址公園（手前）と御殿山公園（奥）が整備され、城跡をしのぶよすがとなっています。

一方、弟の自胤は、幕府・上杉氏方としての立場を堅持し、相模・南武蔵の作戦を分掌した扇谷上杉氏との連携を強めていたようです。特に長尾景春の乱の際には、扇谷上杉氏の家宰・太田道灌（おおたどうかん）の指揮下で合戦に出陣し、道灌が遠征した際には、足利氏一門の吉良氏や、山内上杉氏の重臣ながら連歌等を通じて道灌との関係を深めていた木戸氏などと共に江戸城の防衛にあたるなど、次第に太田道灌との関係も深めていったようです。

太田道灌は、江戸城を拠点に、長尾景春の乱を平定する立役者となりました。江戸城北方の豊島郡域に大きな勢力をもっていた豊島氏一族や江戸城南西の小机城（こづくえじょう。横浜市）の矢野氏など、長尾景春方となった武蔵国南部の有力者を滅ぼすと、彼らの所領のを接収し、その多くは主君の扇谷上杉氏から道灌に与えられたようです。道灌は、声望を高めるにとどまらず、勢力を著しく増大させたのでした。

長尾景春の乱は、幕府・上杉氏方の中核であった山内上杉氏内部の分裂が発端でしたから、そのまま山内上杉氏の勢力弱体化につながりました。これに危機感を抱いた山内上杉氏の当主・上杉顕定（あきさだ）は、１４７８年（文明１０年）正月、幕府との和睦を仲介することを条件に、古河公方と和睦しました。ところが、古河公方方の有力者である下総国の千葉孝胤は、長尾景春を強く支持していましたから、和平に強硬に反対しました。千葉孝胤にしてみれば、本来の千葉氏本家を乗っ取った立場であり、本家の流れをくむ武蔵千葉氏が上杉氏方の有力部将としている以上、上杉氏との和睦は自身の地位を脅かすことになることを恐れたのかもしれません。これをみた扇谷上杉氏は、古河公方の了解をとりつけた上で、千葉孝胤の討伐に乗り出しました。前線でこれを指揮したのも太田道灌でした。

１４７８年１２月、武蔵千葉氏の千葉自胤を旗頭とする軍勢が下総国に侵攻、境根原（千

葉県柏市）で下総千葉氏勢と会戦し勝利を収めました。勝ちにのった侵攻軍は下総千葉氏の拠点の臼井城（千葉県佐倉市）を包囲し、道灌の弟・資忠（すけただ）の戦死などの大きな犠牲を払いながら臼井城を攻め落しました。臼井城にはいったん、千葉自胤が入りました。１４５６年、市川城を攻め落され武蔵国に逃れてから、実に２３年ぶりの下総国への返り咲きでした。

但し、自胤の下総国での勢力回復は長続きしませんでした。この侵攻軍の中核は、扇谷上杉氏勢、なかでも太田道灌の指揮によるものでした。道灌は臼井城攻防中に上総国にも侵攻し、古河公方方の庁南（ちょうなん）武田氏と真里谷（まりやつ）武田氏を屈服させるなど、この作戦でも大きな役割を果たしました。自胤の軍勢のみでは下総国の支配を維持できないのは火を見るよりも明らかでした。自胤はまもなく城代を臼井城に置いて、自身は石浜城（東京都台東区）に引き揚げたといいます。その後、下総国の千葉氏領での自胤の活動はみられなくなることから、まもなく千葉孝胤に臼井城を奪回されたと考えられます。

深まる戦国の中で

２８年間続いた享徳の大乱は、幕府と古河公方との和議が整い、１４８２年（文明１４年）に終結しました。内乱の終結によっても、古河公方足利成氏が鎌倉に復帰することはなく、山内上杉氏・扇谷上杉氏が事実上の支配を進めた地域がそれぞれの勢力圏となりつつありました。扇谷上杉氏は勢力を著しく拡大しましたが、それ以上に家宰の太田道灌の威勢が高まりました。下剋上が当たり前の世、このことは主人の上杉定正に危機感を抱かせたようです。１４８６年（文明１８年）７月、悲劇が起こります。上杉定正の相模国糟屋（神奈川県伊勢原市）の館に招かれた道灌は、そこで定正の刺客により暗殺されたのです。

道灌の死は、大きな波紋を引き起こしました。道灌の本拠の江戸城は定正によって接収され、定正側近の曽我氏が城代として江戸城に入りました。道灌の嫡子・資康（すけやす）は甲斐国（山梨県）に逃れるなど、扇谷上杉氏家中に大変動が起こりました。それだけではありません。山内上杉氏と扇谷上杉氏が抗争を始めたのです。享徳の乱とその末期に起こった長尾景春の乱は、山内上杉氏の勢力を大きく削ぐことになりました。山内上杉氏旧勢力範囲を侵食する形で勢力を広げて、拮抗する勢力を築いた扇谷上杉氏との間には、政治上の主導権争いに加えて、地域社会における領主層を家臣として編成していく上での対立もありました。扇谷上杉氏勢力拡大の立役者・太田道灌の非業の死は、山内上杉氏が扇谷上杉氏を圧服する絶好の好機と考えられたのでしょう。

衝突は道灌の死の翌年、１４８７年（長享元年）閏１１月（うるうじゅういちがつ。太陽暦が導入されるまで、数年に一度閏年がありました。現在の閏年は例年よりも１日多い形ですが、当時は１か月多くなりました。１４８７年の場合には、１１月が終わったあと、もう１回１１月があり、そのあとに１２月を迎えました。この２回目の月のことを閏月といいます）に始まり、山内上杉氏は当主・顕定の生家である越後国（新潟県）国主の越後上杉氏の支援を受け、扇谷上杉氏は古河公方二代目の足利政氏（まさうじ）の支援を受けました。両上杉氏の対立は、関東と周

辺の領主層を巻き込む内乱となりました（長享の乱）。内乱は途中の休戦期をはさんで、１５０５年（永正２年）まで１８年間も続き、もはや山内上杉氏が継承する関東管領は関東統治上の役職としての実質を失い、両上杉氏がそれぞれの支配領域を有する戦国大名化していくこととなります。また、岩槻城が信頼性の高い史料に初めて登場するのも、この内乱の渦中のことです（１４９４年・明応３年）。

この内乱では、父を殺された太田資康はもちろんのこと、千葉自胤らも扇谷上杉氏を見限り、山内上杉氏のもとに参陣し、扇谷上杉氏勢と激しく戦いました。後ほど述べるように、この時期の武蔵千葉氏の主要な所領は、赤塚（東京都板橋区）・石浜（同台東区）・渕江（同足立区）などの江戸城近接地域でしたから、山内上杉氏方についた武蔵千葉氏は、扇谷上杉氏の重要拠点である江戸城に対する最前線であり、扇谷上杉氏勢の攻撃に常にさらされていたのではないでしょうか。

そうした中、１４９７年（明応６年）、千葉自胤の重臣の円城寺平六が大石石見守を討ち取ったといいます。この大石石見守は、かつて自胤の兄の実胤が一時期身を寄せた葛西地域の有力者です。元来、山内上杉氏の重臣でしたが、長尾景春の乱の際に主家を裏切り、ついで太田道灌の圧力を受けて扇谷上杉氏に臣従するようになったといいます。葛西地域は、武蔵・下総国境の隅田川をはさんで、自胤の拠点・石浜や渕江の対岸。指呼の間で敵方に分かれた者たちの戦闘のようにみえますが、これ以前に武蔵千葉氏は葛西地域に所領を獲得しており、この争いの背景には、武蔵千葉氏と大石氏との間で所領支配をめぐる争いがあった可能性も指摘されています。この事件は、華々しい会戦や名だたる武将の武勇譚とはまた別の、内乱の実情を垣間見せてくれます。

この時期、武蔵千葉氏はそれまでの石浜・赤塚に加えて上記の葛西地域にも勢力を広げ、さらに下足立南端部の渕江地域にも所領を獲得していました。転変に翻弄されながら戦国時代の前半を生きた千葉自胤は、１４９４年（明応３年）、「三間田」で世を去ったといいます。この「三間田」は「所領役帳」における「千葉殿」の知行地として現れていた下足立の「三俣」です（「前編」１ページ、「千葉殿」所領⑩）。この地は、石浜と隅田川対岸の隅田宿で一体となる都市的空間の北側に位置し、入間川・荒川等の合流部に形成された中州状の土地であったともいい、石浜・隅田宿を補完しつつ江戸湾と内陸部との水上交通を掌握する要衝でした。千葉氏に関する歴史書には、武蔵千葉氏を「三俣屋形」と敬称する記述もみられ（『千学集』）、武蔵千葉氏の重要な拠点があったと考えられます。

図 11　石浜と葛西
石浜と隅田を渡す隅田川の白髭橋上より。左手が武蔵国石浜、
右手が下総国葛西御厨。正面奥には足立郡三俣・渕江。

１５２０（永正１７年）、自胤の

跡を継いだ千葉守胤夫妻が東常和とともに京に百人一首和歌を送った記録があります。東常和は、享徳の乱の初期に千葉兄弟支援のために特派された東常縁の子です。和歌や連歌の大家としても知られた東常縁のたしなみは子にも受け継がれ、さらに武蔵千葉氏との和歌を通じた所縁が続いていたことがわかります。武蔵千葉氏に即していえば、深まる戦国の世においても、彼ら上層の武家は和歌などの文芸のたしなみを続けていたわけです。

なお、その３年後（大永３年）には、常和とその子・尚胤が一緒に和歌を京に送っていますが、彼らは「渕江」から和歌を送ったといいます。この渕江は、「所領役帳」にみえる「渕江」(⑤）にあたると思われますが、それより広い地域名の可能性もあります。先ほどもみた南北朝時代の赤塚郷が「所領役帳」の段階では「赤塚六ヶ村」とされているように、戦国時代には「郷（ごう)」という単位の解体が進み、「村」を基本単位とする形へと所領支配の再編が進んでいました。「所領役帳」の下足立における「千葉殿」知行地全域も、戦国時代以前には渕江郷と呼ばれる所領単位でした。

北条氏への帰服

長享の乱は、１５０５年（永正２年）３月、本拠の河越城を攻囲された扇谷上杉氏が降伏して終結しました。ようやく平穏な日が訪れると思ったのもつかの間、今度は古河公方家で内紛・抗争が始まり（１５０６年)、ついで越後に遠征した山内上杉顕定の討死（１５１０年・永正７年）とその後の山内上杉氏の分裂・抗争が続きました（永正の乱)。対立する古河公方家の二派と山内上杉氏の二派はそれぞれ連携し、そこに扇谷上杉氏も一方の味方となって争い、旧来の関東の支配層の分裂と抗争は泥沼化していきました。

そうした中、長享の乱の最中に堀越公方を滅ぼして伊豆国に進出した伊勢宗瑞（いせそうずい。いわゆる北条早雲）は、扇谷上杉氏と同盟を結んでいましたが、１５０９年、同盟を破って扇谷上杉氏の基盤である相模国の攻略を開始しました。次第に領国を侵食されていく扇谷上杉氏は、分裂を統合した山内上杉氏と同盟し、伊勢宗瑞の侵攻に抗戦していきます。このため、伊勢宗瑞の相模国制圧は一進一退を繰り返しましたが、１５１６年、扇谷上杉氏方の大名・三浦氏を滅ぼし、相模国を手中に収めました。その二年後、宗瑞は家督を子の氏綱に譲りました。この氏綱のもと、本拠を小田原城と定め、名字を北条と改めて、戦国大名北条氏が確立しました。そして、いよいよ武蔵国への進出を本格化させていきます。

長享の乱の初期に扇谷上杉氏から離反し、山内上杉氏の陣営に身を投じた武蔵千葉氏は、やがて再び扇谷上杉氏との関係を修復し、扇谷上杉氏の配下に属していたようです。残念ながら、その間の経緯を物語る史料を欠いており、その時期や経緯は明らかではありません。相次ぐ戦乱の中で、山内上杉氏の勢力圏―領国が武蔵国北部から上野国に定まり、同時に扇谷上杉氏の領国が武蔵国南部に定まる中で、武蔵国南部の江戸城周辺に本拠を構えていた武蔵千葉氏は、扇谷上杉氏の配下に組み込まれていったのでしょう。しかし、日増しに伊勢氏改め北条氏の圧力が強まる中、武蔵千葉氏には大きな転機が訪れました。１５２４年（大永４年）の北条氏綱による江戸城攻略です。

氏綱が１５１８年（永正１５年）に家督を継いだとき、父宗瑞の代に制圧した扇谷上杉氏の本国・相模国を足掛かりに、武蔵国南端部への侵攻を開始していました。氏綱は武蔵国への進出を精力的に推し進め、武蔵国南部に勢力を築いていた扇谷上杉氏の拠点を攻略して各地に割拠する土豪や国衆たちを配下に取り込んで行くことになります。そして１５２４年（大永４年）、上杉朝興の居城・江戸城を攻略したのです。この時、朝興の重臣・太田資高（江戸城を築いた太田道灌の孫といわれています。この系統の太田氏は「江戸太田氏」と呼ばれています。）が扇谷上杉氏を見限り、北条氏に内応したため、江戸城はあっけなく陥落したといいます。朝興はいったん板橋（東京都板橋区）で態勢を整え反撃に転じようとしましたが、北条勢に追撃され、河越城まで逃れました。

江戸城を攻略した氏綱は、重臣の富永氏と遠山氏を江戸城将としますが、太田資高も江戸城将の一員としての地位と江戸城周辺の所領を氏綱より保障されました。「所領役帳」に登載された江戸太田氏の所領（「所領役帳」編さん当時は、資高の子の康資の代となっていました）をみてみると、江戸城北方に濃密な所領分布がみられます（図 12）。これは、長尾景春の乱に際して道灌が滅ぼした豊島郡の有力武士・豊島氏一族の所領に由来すると考えられます。道灌は豊島氏一族の所領を接収し自己の所領とすることを、主人である扇谷上杉氏より認められ、その後道灌暗殺と太田一族が扇谷上杉氏から離反した際には、扇谷上杉氏から没収されたものの、帰参した際に江戸太田氏に返却されたのでしょう。もちろん、所領は与えられるだけでなく、実力で支配する面が強まっていた時代ですから、江戸太田氏が実力で実効支配を続けた所領や、扇谷上杉氏との戦いの中で占領し、支配地域に加えていった所領などもあったことでしょう。

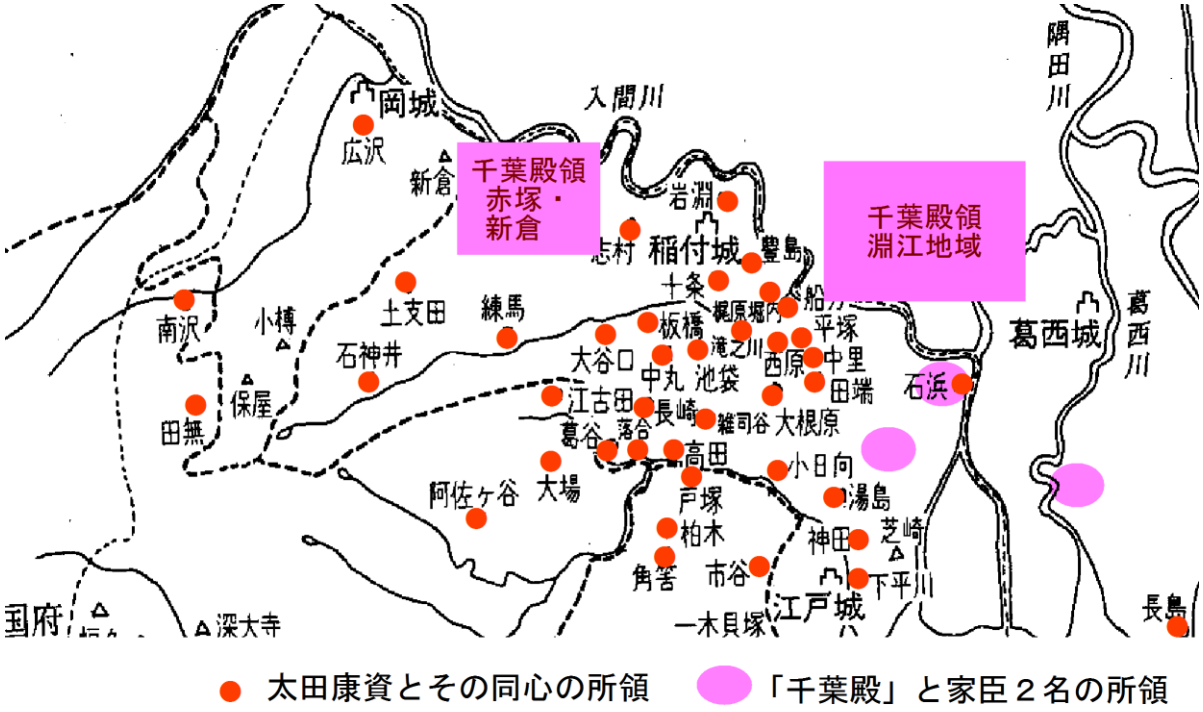


図 12　江戸城北方地域における江戸太田氏領と千葉殿領
※『板橋区史　通史編　上巻』（文献 15）400 頁掲載図に加工・加筆

「千葉殿」の場合にも、江戸太田氏と同様の経過をたどったと考えられます。「千葉殿」は江戸太田氏には及ばないものの、そこそこの規模の所領を維持していました。しかし、主要な所領は赤塚地域と渕江・石浜地域に分かれていましたから、強力な支配地域を形成するには限界がありました。しかも、その間や近接地には江戸太田氏の支配領域が形成されていました。「千葉殿」は太田道灌以来の親交などに加えて、江戸太田氏と連携せず独自の政治的動きをとれる状況にはなかったといえます。「千葉殿」は北条氏綱の江戸城攻略を機に江戸太田氏と足並みを揃えて北条氏に服属することになったと考えられるわけです。

こうして北条氏に帰服した「千葉殿」は、味方についたことを賞されて、恐らくそれまでの所領の知行を保障されました。その上、名門としての高い家格を尊重した処遇を受けました。「春松院殿様（＝北条氏綱）の御代より高除・不入なり。」との「千葉殿」の所領役原則免除の由緒（「前編」８ページ「『所領役帳』の記載を読む」－「『千葉殿』 の特権」）は、この服属の際に氏綱から与えられた恩典であり、高い家格故の優遇措置だったと考えてよいでしょう。

氏綱の「千葉殿」に対する厚遇は、江戸城攻略の最大の功労者である太田資高に対する処遇と対比してみるとより明確になります。新たに氏綱に服属した太田資高は、申告をそのまま認められて従来の所領を知行し、その所領に賦課される所領役も半分に減免されていました。資高は手厚い優遇措置を受けていたのですが、「千葉殿」のような所領役原則免除の扱いまではされていません。さらにいえば、資高は「千葉殿」の倍以上の所領を知行する有力者であり、氏綱の娘を妻に迎え、その子息の元服の際には氏綱の後継者・氏康が烏帽子親を務めてその偏諱「康」の字を与えられ、氏康の養女を妻に迎えています。資高とその後継者は北条一族に準じた処遇を受けていますが、「所領役帳」において「殿」呼称はされていません。

「所領役帳」における「千葉殿」は武蔵千葉氏と呼ばれる武家の名門であり、武蔵千葉氏の誕生から北条氏のもとでの「千葉殿」までの経緯をたどってきました。この「千葉殿」の歩みを踏まえながら、戦国時代に岩付領に包摂されていた「上足立」において「千葉殿」のみが「内野郷」「大窪村」「大多窪」の三所領を知行していた、否むしろ、知行できていたのは何故なのか、その探索へと進んでいきましょう。

おもな文献

・文献番号、執筆者、書名または論考名、（掲載書）、発行者、刊行年の順で紹介します。
・文献番号は前編からの通し番号としました。
・文献番号と書名を太字にしたものは、さいたま市立図書館が収蔵している図書です。所蔵館は、さいたま市図書館ホームページにて御確認ください。

1　佐脇栄智（校注）**『戦国遺文北条氏編　別巻　小田原衆所領役帳』**東京堂出版　1998 年
2　峰岸純夫　**『中世災害・戦乱の社会史』**吉川弘文館　2001 年
3　加増啓二　「武蔵千葉氏の末裔－埼玉県浦和市太田窪の千葉家とその旧蔵文書の検討を中心に－」**『埼玉地方史』第 23 号**　1988 年
4　黒田基樹　**『扇谷上杉氏と太田道灌』**岩田書院　2004 年
5　湯山　学　『関東上杉氏の研究』（湯山学中世史論集１）　岩田書院　2009 年
6　加増啓二　**『戦国期東武蔵の戦乱と信仰』**岩田書院　2013 年
7　板橋区立郷土資料館　『武蔵千葉氏』（特別展図録）　同館　2015 年
8　黒田基樹　『戦国期関東動乱と大名・国衆』（戎光祥研究叢書第 18 巻）　戎光祥出版　2020 年
9　足立区立郷土博物館　『戦国足立の三国志－宮城氏・舎人氏・武蔵千葉氏－』（企画展図録）　同館　2019 年
１０　北区史編纂調査会　『北区史　通史編　中世』　東京都北区　1996 年
１１　湯山　学　『三浦氏・後北条氏の研究』（湯山学中世史論集２）　岩田書院　2009 年
１２　盛本昌広　「戦国前期六浦における扇谷上杉氏家臣の動向」　黒田基樹編**『扇谷上杉氏』**（シリーズ・中世関東武士の研究　第５巻）戎光祥出版　2012 年
１３　黒田基樹　『戦国大名領国の支配構造』　岩田書院　1997 年
１４　梶原正昭（校注）　**『義経記』**（新編日本古典文学全集　62）　小学館　2000 年
１５　板橋区史編さん調査会　『板橋区史　通史編　上巻』　東京都板橋区　1998 年

武蔵千葉氏関連略年表

西暦	年	月	できごと
(1454)	享徳3	12	鎌倉公方足利成氏が関東管領上杉(山内)憲忠を謀殺する　　関東の戦国時代幕開け
1455	康正1	1	成氏、上杉氏掃討のため、鎌倉を出て武蔵府中に着陣
			上杉方、武蔵府中に総攻撃をしかけるが、成氏方に迎撃され大敗
			成氏、常陸国小栗城に逃れた上杉方主力の長尾勢を追撃して北上
		3	成氏が古河城に入る
		3	**下総国守護千葉介胤直が成氏方の馬加康胤、重臣原胤房らに攻められ、千葉城から没落**
			関東管領山内上杉房顕が上野国平井城に入る
		6	駿河国守護今川氏らが幕府の命により鎌倉を攻略
		8	**千葉介胤直らが多古城を攻められ、子の宣胤、重臣円城寺氏らが討死。ついで胤直が自刃**
		9	**上総国小堤に逃れていた千葉介胤直の弟の胤賢が自刃、千葉氏本宗家が事実上滅亡**
		11	幕府奉公衆で千葉氏一族の東常縁と美濃国守護土岐氏一族の浜春利らが千葉氏本宗家支援のために関東に特派される
			東常縁は足立郡淵江郷を拠点としたとの説あり
			胤賢の遺児･実胤･自胤兄弟が下総国市河城に籠城
		12	古河公方方が下野国南部を制圧し、武蔵国に進出
			上杉氏方が前線基地として築いた騎西城が落城
1456	康正2	1	古河公方方が下総国市川城を総攻撃
			市川城落城、籠城していた千葉実胤･自胤は武蔵国に逃れる
		11	東常縁が馬加康胤を討ち取る
1457	長禄1	4	扇谷上杉氏が河越･江戸城を築城
			武蔵千葉氏被官の円城寺氏が下総国に侵攻
		5	**山内上杉房顕(管領)、円城寺氏と連携して下総に侵攻するよう、常陸国信太郡の山内上杉氏被官衆に命ず**
		7	将軍足利義政が弟の政知を鎌倉公方とする
1458	長禄2	3	鎌倉公方(堀越公方)足利政知が岩松氏に味方に参ずるよう命ず
			渋川義鏡と朝日教忠がこれに副状
		4	足利政知の奉行人が鎌倉黄梅院に禁制を発給する
		8頃	前年鎌倉公方に任命された足利政知が東国に下向し、いったん伊豆国に本営を構える(堀越公方)
			政知の補佐官として随伴した渋川義鏡は相伝の所領武蔵国足立郡蕨郷に蕨城を取り立てたという
		8頃	渋川義鏡の重臣･板倉頼資が鎌倉建長寺西来庵と円覚寺黄梅院の相模国内所領に禁制を発給
		9	臨川寺三会院主が板倉頼資に書状を送り、関東下向を寿ぐとともに、末寺黄梅院につき扶助を依頼する。なお、「御屋形」への披露も依頼。 ※これまでは「鹿王和尚」(赤塚郷代官？)を頼っていたが、これからは貴殿を頼る旨の文言あり。
1459	長禄3	10	幕府･上杉氏方が武蔵国五十子に本営を築く(五十子陣)

		11	渋川氏が堀越公方の命により浅草に陣営を築くが、間もなく病死し、軍勢は伊豆国堀越方・鎌倉方面等に撤収
1460	寛正1		**千葉介実胤の困窮に対策を講じるよう、将軍義政が堀越公方政知に命ず**
		8	堀越公方政知が伊豆から鎌倉に向おうとしたことに対して、将軍義政が制止する
		10	幕府が関東・奥羽の諸将に足利成氏追討を命じる
1461	寛正2		この年、飢饉・疫病が流行する(寛正の大飢饉)
		12	将軍義政が駿河守護今河氏に堀越公方への支援を命じる
		12	扇谷上杉氏と堀越公方が争い、幕府の裁定で扇谷上杉氏の主張が認められる
1462	寛正3	4	**将軍足利義政が千葉介自胤への扶助を堀越公方に命ず**
			将軍足利義政が千葉自胤に御内書を送り、千葉実胤の隠遁による家督継承を認め、一層の忠節を命ず
			また、実胤にも御内書を送り、復帰を命ず
		11	**堀越公方が幕府の命により、鹿王院領武州赤塚郷の千葉実胤の兵粮料所を停止し、鹿王院に返付し、実胤には替地を渡すよう、山内上杉氏家宰長尾景信に命ず**
1463	寛正4	2	**堀越公方が幕府の命により、鹿王院領武州赤塚郷を鹿王院に返付するよう、千葉実胤に命ず**
1465	寛正6	6	千葉氏被官の原信濃入道と同八郎が幕府・上杉氏方に転じる
1466	文正1	6	将軍足利義政が原信濃入道と同八郎に御内書を送り、味方に参じた忠節を賞し、松渡城郭の死守と「両総州」の入国に尽力するよう命じる
		6	幕府が上杉顕定を関東管領に任命する
			幕府が関東・奥羽諸将に足利成氏追討を命じる
1467	応仁1	5	応仁の乱勃発
1468	応仁2	7	渋川義鏡の子で斯波氏の養子となり幕府管領となっていた斯波義廉が失脚
		10	豊島勘解由左衛門が上野国綱取河原合戦における軍功を上杉顕定より賞される
1469	文明1	4	東常縁が上洛。東国には子息の縁数を留めたという
1470	文明2	8	原信濃入道朗意が「水ハツ」(水判土)において死去
1471	文明3	1	伊豆国三島大社において宗祇が東常縁より古今伝授を受ける
		3	古河公方方の軍勢が長駆して伊豆国三島に出陣、堀越公方方と闘い敗退
		4	豊島勘解由左衛門が下野国足利荘赤見城攻めにおける軍功を上杉顕定より賞される
		5	豊島勘解由左衛門らが上野国佐貫荘立林城(館林城)攻めにおける軍功を上杉顕定より賞される
		6	山内上杉氏家宰長尾景信の率いる幕府・上杉氏勢が古河城を攻略する
			古河公方成氏は古河城から千葉に逃れる
1472	文明4	2	古河公方成氏が結城氏らの支援を受けて古河城を奪回する
			この頃、鎌倉長寿寺領殖田谷郷(さいたま市西区)の代官職をめぐり、山内上杉氏家宰長尾景信と扇谷上杉氏家宰太田道灌の間で紛糾
1473	文明5	6	山内上杉氏家宰の長尾景信が五十子陣にて死去
			山内上杉氏の家宰職は景信の弟の忠景が継承
1477	文明9	1	長尾景春が五十子陣を攻撃、同陣崩壊(長尾景春の乱)

		4	江古田原合戦(東京都中野区) 太田道灌が景春与党豊島氏と会戦。 **千葉自胤、上杉朝昌とともにこれに馳せ加わり、戦功を挙げる**
			この後、道灌は上州方面に転戦、千葉自胤もこれに加わる。自胤被官は江戸城を守る。
		5	用土原合戦(大里郡寄居町) 渋川氏重臣の板倉美濃守が太田道灌方として参陣
1478	文明10	1	山内上杉顕定が足利成氏と和睦
		3	上杉氏との和睦に反対する千葉孝胤が長尾景春とともに羽生に陣を敷く
		12	**太田道灌が千葉自胤に合力して下総に侵攻、境根原(千葉県柏市)合戦で勝利** ※渋川義鏡も参陣(道灌状)
1479	文明11		**千葉自胤勢、千葉孝胤の本拠臼井城(千葉県佐倉市)を攻める。上総領武田氏帰服**
			千葉自胤、城代を臼井城に置き、自身は石浜に帰城
1482	文明14	11	幕府と足利成氏が正式に和睦(都鄙合体)
			堀越公方政知は伊豆国を料国とする
1486	文明18	春	太田道灌が下総を攻めるために隅田川に橋3条を架ける
		7	太田道灌が主君扇谷上杉定正により謀殺される
1487	長享1		山内上杉氏と扇谷上杉氏が抗争(長享の乱)
			千葉介自胤、道灌嫡子資康とともに山内上杉氏に帰服
1491	延徳3	12	両上杉氏和睦
1492	明応1	11	**千葉玄三が赤塚郷宝徳寺に寺領を寄進**
1493	明応2	12	**千葉自胤、三間田(東京都足立区)で死去**
1494	明応3	7	両上杉氏の抗争が再発
1495	明応4	8	南関東で大地震(明応地震)。大津波により鎌倉に大被害。
		9	伊勢宗瑞が大森氏を破り相模国小田原城を奪取
1497	明応6	9	古河公方足利成氏死去
		12	**千葉介自胤の重臣円城寺平六が大石石見守を討ち取る**
1498	明応7	1	**円城寺平六が死去**
1501	文亀1		
1504	永正1	9	山内上杉顕定、扇谷上杉氏の江戸城を攻めるため、白子(和光市)に着陣
		9	山内上杉氏･古河公方連合軍と扇谷上杉氏･今川氏･伊勢氏連合軍が武蔵国立河原(東京都立川市)で会戦、扇谷上杉氏方が大勝
1505	永正2	3	扇谷上杉朝良が越後国守護上杉氏の援軍を得た山内上杉顕定に河越城を攻囲され、降伏(長享の乱の終結)
1506	永正3	4	古河公方足利政氏と嫡子高氏の抗争勃発(永正の乱)
1509	永正6		山内上杉顕定が越後国守護代長尾為景討伐のため、越後国に侵攻(翌年敗死)
1510	永正7	7	伊勢宗瑞が武蔵国に進出し、扇谷上杉氏重臣の上田氏を調略し、権現山城に置く。扇谷上杉氏がこれを攻め、山内上杉氏も直轄軍と有力国衆の成田･藤田･渋江氏らを援軍として派遣。権現山城を扇谷上杉氏が奪回
1520	永正17	9	三条西実隆が東常和、千葉守胤夫妻より送られた百人一首歌に合点を付し、返歌を贈る
1522	大永2	2	太田資頼が北条氏綱の支援を受けて、渋江氏の岩槻城を攻略
1523	大永3	9	東常縁の孫尚胤と子常和が渕江より京の三条西実隆に和歌を贈る

1524	大永4	1	北条氏綱が江戸城を攻略
		3？	北条氏綱が蕨城を攻略
		8	北条氏綱が三室郷(さいたま市緑区)に制札を発給
1525	大永5	2	北条氏綱が岩槻城を攻略。渋江三郎に岩槻城を預ける。
			岩槻城主太田資頼は石戸城(北本市)に逃れる
1526	大永6		上杉氏方の攻勢により北条氏綱の蕨城が落城
1531	享禄4		太田資頼が渋江氏を討って岩槻城を攻略
1537	天文6	7	北条氏綱、河越城を攻略
		8	北条氏綱･氏康、笹目郷を鶴岡八幡宮に安堵
		12	**千葉守胤死去**
1541	天文10		北条氏綱没
1545	天文14		山内上杉･扇谷上杉･古河公方連合軍が河越城を包囲
			岩槻城主太田全鑑、北条氏方に転ずる
1546	天文15	4	北条氏康、上杉氏らの河越城攻囲陣を撃破。扇谷上杉氏滅亡
1547	天文16		岩槻城主太田全鑑が死去
			反北条氏方として松山城にいた弟の資正が岩槻城を占拠、城主となる
1548	天文17	1	北条氏康が岩槻城を攻囲、資正、氏康に降伏
1557	弘治3	11	**千葉親胤死去**
1559	永禄2		**北条氏康、「所領役帳」を編成させる**